様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 5 月 28 日現在

研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2007～2009
課題番号：19320018
研究課題名（和文）　ひと概念の再構築をめざして　―人文科学・アート・医療をつなぐ問いかけ

研究課題名（英文）　For the reconstruction of the notion of human being -questions that relate human science, art and medicine

研究代表者　多賀　茂（TAGA SHIGERU）
京都大学・大学院人間・環境学研究科・教授
研究者番号：70236371

研究成果の概要（和文）：ひとという概念が現代の先端医療・国際情勢・社会状況との関係の中で直面する問題を鮮明にしつつ、さらにそれを乗り越えるための指針を見定めることに成功した。さらに内外の様々なアーティストや研究者を招聘し研究会やシンポジウムを開催したことは、一般への知的刺激という面でも大いに成果があった。

研究成果の概要（英文）：Our project explicated the problems encountered by the notion of human being in relation to high-advanced medicine, international situations and social conditions of our day, and fixed the outline for overcome it. The symposiums and research meetings we have organized with Japanese and international searchers and artists gave great results for public intellectual stimuli.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	6,000,000	1,800,000	7,800,000
2008 年度	5,300,000	1,590,000	6,890,000
2009 年度	4,100,000	1,230,000	5,330,000
年度			
年度			
総　計	15,400,000	4,620,000	20,020,000

研究分野：
科研費の分科・細目：社会思想史
キーワード：ひと・思想・現代社会・先端医療・現代芸術・生命倫理

１.研究開始当初の背景　私は３年にわたって科学研究費補助を得て､｢病院環境をめぐる思想　―フランス精神医学制度の歴史と現状から見えてくるもの」という研究会を主催した。人間が人間らしくいることができる抑圧的でない病院環境はいかにして作れるのかという問題を多くの人たちとともに考えてきた。その過程でフランスの制度論的精神療法のグループや日本での精神保健福祉支援活動のグループなどさまざまな活動を行っている人たちとの出会いがあったが、幾つもの場所で私が聞いた言葉は、「人間というのは、全体として生きているものですからね」という言葉だった。研究会の最終的な結論はこの言葉に集約されることになった。すなわち、とりわけ加速度的に進みつつある医療の高度化・高能率化と経済原理による支配の中にあって、私た

ちが守らなければならないのは＜全体としての人間＞であるということであった。

２．研究の目的　＜全体としてのひと＞をどのように思考し言語化すればよいのか。これまで医学と哲学の出会いは幾度となく試みられてきたが、それらが結局不十分に終わってきたのにはどうやら二つの理由がある。第一に、両者の間をつなぐ領域を飛び越して、乖離した場所から＜ひと＞についての議論を行っているために、内実が欠如してしまっていること。第二に、両者を越えるような領域への目配りがないために、議論が矮小化してしまうこと、である。

実際医学は医学として独立してこの社会に存在しているのではなく、常に経済的要因や法制度との関わりの中で私たちは医学と関わっている。経済や法学を含めた様々な人文諸科学においてこれまでに展開されてきた＜ひと＞という概念を綿密に調査することで、私たちはより内実を伴った議論ができるだろう。とりわけルネサンス以降のヨーロッパにおける人文諸科学の発展は、まさに＜ひと＞という概念を巡って繰り広げられてきたのであった。

では医学や哲学をもさらに越えて＜ひと＞を思考するとは、どういうことなのか。芸術は見えないものを見せてくれる力を持っていること、考えもしなかったことを考えさせてくれる。芸術こそは、これまであった＜ひと＞概念の外へと私たちを連れ出してくれる力なのではなかろうか。おそらく先進医療がもたらす積極的な意味もここから見えてくるかもしれない。

３．研究の方法　１）＜ひと＞という概念をめぐって人文科学の諸領域において何が考えられてきたか、何が今考えられつつあるかを私たちメンバーそれぞれの専門領域について再検討し、２）医療において＜ひと＞という概念が現在どんな問題に直面しているかを、医療関係者への聞き取り調査を通じて整理する。３）私たちのテーマに深く関わるような仕事を行っているアーティストたちと共に、実演や展示あるいは意見交換を通じて＜ひと＞という概念の展開の可能性について検討する。

４．研究成果

平成 19 年度は、現代社会において、ひと概念の再構築という問題が、人文科学・アート・医療という異なった領域をどのような形で貫通しうるか、またどういう点にその可能性が見いだされるかを見定めながら、プロジェクト全体のための予備作業を行うことをめざした。まず現代美術と現代社会との関係について、森美術館で活躍する研究者である椿玲子氏から報告を受けたのち、医療人類学の領域における世界的権威であるアラン・ヤング教授の講演を主催し、また人文科学の領域においてはハイデガー哲学とひと概念の関わりについてのシンポジウムやフロイトの精神分析についてのシンポジウムを開催した。また研究会においては、主にフランス現代思想や精神医学とひと概念について検討した。一方、今後の年度に行われるべき研究や活動の準備をすることも行った。まず芸術家としては、アメリカ在住の写真家森本洋充氏、日本におけるコンテンポラリー・ダンスの第一人者である勅使河原三郎氏などと連絡を取り、当研究への参加・協力について承諾を受けた。また人文科学の領域においては、フランスの生命倫理学を代表する法学者であるカトリーヌ・ラブリュス＝リウ氏を訪問し、来日の承諾を受けた。日本においては宇野邦一氏などと今後の研究への協力についての話し合いを行った。

平成 20 年度は、前年度に行った準備的調査・研究の成果が現れ始めた年度であった言えるだろう。人文科学・アート・医療の接点を創設しつつ、その場において「ひと」という概念について、新たな見解を探求するということが私たちの目標であったが、それは例えば 2008 年 7 月に行った現代芸術家、塩田千春を招いての研究会において、十全な形で実現された。「ひと」という存在が抱える苦しみや不安の大きさをそのまま作品にする塩田の世界に対して、カナダ・マッギル大学の精神科医・医療人類学者カーマイヤー教授は、戦争や殺戮をめぐる人類の暴力の歴史を指摘され、私たちの視点を世界の様々な民族の間の諸問題へとむけさせた。そのほか、フロイトの思想をめぐる研究会、病院内における芸術活動の紹介、舞踏家土方巽の上映会、制度を使った精神療法をめぐる研究会など多くの成果が上がった。さらに 2009 年に入ってからは、フランス・ボルドー大学からル・ブラン教授を招いて、フランスの思想家ミシェル・フーコーにおける「ひと」の概念について講演会とセミナーを開いたほか、日本を代表する舞踏家勅使川原三郎と思想家宇野邦一を招いて、人間の身体の再発見をめざすワークショップを開いた。いずれの会も、私たちに現代において「ひと」が置かれている危機的状況や、その状況から私たちが抜け出すために、今私たちはどういう手順で、ど

いう問題について考えなければならないかを明確に示してくれた。一方、海外や国内での研究調査も継続して行った。

最終年度である平成 21 年度は、計画を発展させつつ、最終的なまとめを行った。まずアーティストとのコラボレーションに関しては、懸案であった内藤礼氏の招聘が実現した。現代日本を代表する内藤氏の作品は、ひとの最奥にある「人間的空間と時間の始原」とでも言えるような希薄にして強烈、純粋にして茫漠たる世界を表現しており、ビデオ・映像を交えての彼女との意見交換は私たちの研究にとって実り豊かなものとなった。また私たちの研究のまとめとして、これも懸案だったフランス生命倫理法の専門家である法学者カトリーヌ・ラブリュス＝リウ氏の招聘も実現し、その際日本側からは同様の専門家櫛島次郎氏の参加を得て、シンポジウムを開催した。フランスにおける生命倫理法の整備作業が、常に「ひと」という概念の革新と共に行われていることが浮き彫りになり、我が国での同様の試みを行う際に留意すべき重要課題を明確にすることが出来た。このほか、昨年度招聘した勅使川原三郎氏のもとで頭角を現している若手ダンサー佐東利穂子氏との討論会、レヴィナスやアーレント研究を専門とするパリ第 7 大学教授マルティーヌ・レイボヴィッチ氏の講演会、研究会メンバーである大黒弘慈氏による講演会を催したほか、数度の研究会も行い、「ひと」という概念が関わる問題系を洗い直し、それを出発点としながら、メンバーそれぞれの専門領域で「ひと」という概念の構築を試みた。

以上のように、当研究プロジェクトは 3 年間の間に、ひとという概念が現在直面する問題を鮮明にしつつ、さらにそれを乗り越えるための指針をとりわけアーティストから引き出すことに成功したと言えるだろう。さらに内外の様々なアーティストや研究者を招聘し研究会やシンポジウムを開催したことは、私たちの研究の進展のみならず、基本的に一般公開として開催したシンポジウムや講演会などによって、一般への知的刺激・問題提起という面でも大いに成果があっただろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 9 件）
1. 多賀　茂 「フロイトとモーパッサン」岩波書店『フロイト全集』月報、査読無、12 巻、2009 年，11-15 ページ
2. 大黒　弘慈「模倣と経済学　−タルド『模倣の法則』を手がかりに」『社会システム研究』、査読無、12 巻、2009 年、1-36 ページ
3. 杉万　俊夫「人間科学における主観的言説の重要性」『集団力学』、査読有、26 巻、2009 年、1-13 ページ
4. 立木　康介「結び目と振り子（下）　−ジャック・デリダ『精神分析の抵抗』についてのノート」『思想』、査読無、1018 巻、2009 年、57-75 ページ
5. 立木　康介「結び目と振り子（上）　−ジャック・デリダ『精神分析の抵抗』についてのノート」『思想』、査読無、1017 巻、2009 年、24-40 ページ
6. 杉万　俊夫「原子力発電所補修部門の安全文化醸成に向けた全社的活動」『INSS Journal』, 査読無、15 巻、2008 年、338-344 ページ
7. 立木　康介「フロイトとサド」『思想』、査読無、1008 巻、2008 年、6-21 ページ
8. 西井　正弘「テロリストによる核の脅威に対する法的対応」『世界法年報』査読有、26 巻、2007 年、99-133 ページ
9. 三脇　康生「精神科医ジャン・ウリの仕事−制度分析とは何か」『思想』、査読無、998 巻、2007 年、43-73 ページ

〔学会発表〕（計 5 件）
1.大黒　弘慈「模倣と経済学」、経済学史学会関西支部、2009 年 7 月 29 日、福井県立大学
2.杉万　俊夫「活動理論に基づく現場研究アプローチ」、シンビオ社会研究会、2009 年 5 月 8 日、京大会館
3.三脇　康生「日本の精神分析とメルロ＝ポンティ」多文化間精神医学会、2009 年 3 月 27 日
4.岡田　温司「半透明をめぐって」、Art studium、2008 年 12 月 20 日、近畿大学国際人文科学研究所
5.杉万　俊夫「ヒューマンインタラクションの研究」、会話分析研究会、2008 年 1 月 14 日、埼玉大学

〔図書〕（計 4 件）
1.岡田　温司『キリストの身体　−血と肉と愛の傷』（中公新書）、2009 年、278 ページ
2.多賀　茂・三脇　康生（編）『医療環境を変える　−制度を使った精神療法の実践と理論』（京都大学出版会）、2008 年、426 ページ
3.多賀　茂『イデアと制度　−ヨーロッパの知について』（名古屋大学出版会）、2008 年、313 ページ
4.岡田　温司『マグダラのマリア』（中央公論新社）、2007 年、274 ページ

６．研究組織

(1)研究代表者

多賀　茂（TAGA SHIGERU）
京都大学・大学院人間・環境学研究科・教授
研究者番号：70236371

(2)研究分担者

西井　正弘（NISHII MASAHIRO）
京都大学・大学院人間・環境学研究科・教授
研究者番号：60025161
杉万　俊夫（SUGIMAN TOSHIO）
京都大学・大学院人間・環境学研究科・教授
研究者番号：10135642
岡田　温司（OKADA ATSUSHI）
京都大学・大学院人間・環境学研究科・教授
研究者番号：50177044
大黒　弘慈（DAIKOKU KOUJI）
京都大学・大学院人間・環境学研究科・准教授
研究者番号：50262126
立木　康介（TSUIKI KOUSUKE）
京都大学・人文科学研究所・准教授
研究者番号：70314250
三脇　康生（MIWAKI YAUO）
仁愛大学・人間学部・教授
研究者番号：40352877

(3)連携研究者

（　0　）

研究者番号：